藤原長子という女性―同化と庇護する愛情―

阿部　絵里香

（一）

『讃岐典侍日記』は平安時代後期に成立した女流日記作品の一つである。この作品は女流作品の中でも、著者が明確になっていることは勿論、その著者の名前までも明らかになっている極めて珍しいものといえる。多くの先学の御研究により、この作品の作者は藤原顕綱女長子であると言われている。[1]

残念ながら藤原長子の出没年や人生の足跡に関する詳細は分かっておらず、著者名が分かっていることそのものも、作品に対する評価を大きく左右するものではない。しかし、著者の名前を史料から得ることができるのは、作品をより私達の身近に感じさせる効果を生んでいるといえる。そのことは、私達が作品に触れるときに、より深みと新鮮さを与えてくれるように思われるのである。

私はこの作品を読んだ時、作者が自身の視点から感情的に、そしてある意味とても冷静に人間の死というものを記していく集中力と生々しさ、その人物が死してなお、起こりうる全ての出来事を、その人の回想へと繋げていってしまう深い愛情とに驚かされた。

繰り返し読み返すうちに、冷徹なまでの観察眼と同居する強い激情を考えていく前提として、今井源衛氏[2]が述べられている「二人の関係をはっきりと、男女のつながりがあったものとして捉え」ておかなくてはならないことも分かってきた。

今井氏の述べられる「男女のつながり」とは勿論、長子が一人の女性として、一人の男性である堀河帝を男性として愛したこと、例えば森田兼吉氏[3]が述べられる「一人の男性に対する慕情といったもの」というものを持っていたことであろう。確かにこの作品はある側面を見れば、著者藤原長子が、女として自分がいかに堀河帝を愛し、また堀河帝に愛されたかを書き綴ったものであるということができる。

しかしながら、読み進めていくうちにこの作品をその方向だけで捉えて良いのだろうかとも思うようになった。もう少し具体的に言えば、この作品を単なる男女の恋愛的な感情で書かれた作品とだけとらえても良いものだろうかということである。

確かに

大殿、近く参らせ給へば、御膝高くなして、陰に隠させ給へば、われも単衣を引き被きて、臥して聞けば……（第五節）

……「（中略）例ならでおはしまいし折など、御かたはらに添ひ臥させ給へりし折に参りたりしかば、御膝高くなさせ給ひて、陰に隠させ給ひし折、『かやうならむことども』とこそ思はざししか。げに陰にも隠れさせ給ひしかな。世はかくもありけるかな」といひかけて立たせ給ひぬる、聞くぞ、「げに」と心憂き。……（第二一節）

をととしの頃に、かやうにて、夜昼御かたはらにさぶらひしに、御心地やませ給ひたりしかども、院より、「あなかしこ、よくつつしみて、夜御殿を出でさせ給はで、暫し」と申させ給ひしかば、つれづれのままに、よしなし物語、昔今のこと語り聞かせ給ひし折、殿の後の方に寄り奉らせ給ひしかば、そのままにてさぶらはむは、なめげに見苦しくおぼえしかば、起き上がりて退かむとせしを、「『見えまゐらせじ』と思ふなめり」とおぼして、「ただあれ。几帳つくり出でむ」とて、御膝を高くなして、陰に隠させ給へりし御心のありがたさ、今の心地す。……（第三一節）

といった堀河帝が膝を高くすることによって、長子の姿を隠してくれたという部分からは、それが何度もあったことであったのか、実際には一度ほどのことであり、それが長子の中に強く印象づいたために何度も登場することなのかという問題は別にして、長子が堀河帝の男性としての強い愛情を感じたと思った部分に違いはないだろう。また、

……御前の火焼屋も埋もれたる様して、今もかきくらし降る様、こちたげなり。滝口の本所の前の透垣などに降り置きたる、見所ある心地して、折からなればにや、御前の立ちし、せめてのわが心の見なしにや、輝かしきまでに見るに、わが寝くたれの姿、目映くおぼえしかば、「常より、美目欲しきつとめてかな」と申したりしを、をかしげにおぼしめして、「いつもさぞ見ゆる」と仰せられて、微笑ませ給ひたりし御口つき、向かひまゐらせたる心地するに……（第三六節）

といった、長子が帝と一緒に朝の雪景色を眺める部分からは、「新婚翌朝とも評してよいほどのみずみずしい恥ぢらいに満ちた愛の喜び」[4]にも似たものが感じられ、確かにこの二人の間には、少なくとも長子が感じられる限りにおいては、主従関係を超えた男女の感情があったのであろうと思わせる。

間違いなく長子は堀河帝に対して、強い恋愛的な感情を持っていたと言える。だが、長子の持っていた感情はただひたすらな男女の恋愛的な感情だけであって、それ以外の別のものはなかったのだろうか。

（二）

本来、長子自身が知る事ができるのは、自分自身の心情と目に映り耳に聞こえる、外因要素のみのはずである。しかし、長子の筆は本来分かるはずもない他人の心情にまで踏み込んでいる箇所がある。

……わが寝くたれの姿、目映くおぼえしかば、「常より、美目欲しきつとめてかな」と申したりしを、をかしげにおぼしめして、「いつもさぞ見ゆる」と仰せられて、微笑ませ給ひたりしつ御口つき、向かひまゐらせたる心地するに、五節の折着たりし、黄なるより紅までにほひたりし紅葉どもに、葡萄染の唐衣とかや着たりし、わが着たるものの色合ひ、雪のにほひ、けざけざとこそめでたきに、頓にもえ入らせ給はで御覧ぜしに、……（第三六節）

当然のことではあるが、長子には雪景色を共に見る堀河帝の心情が分かるはずがない。長子が「常より、美目欲しきつとめてかな」と述べたのに対して、「いつもさぞ見ゆる」と答えたこと、微笑まれたこと以外に堀河帝がどう思っていたのかを知ることはできないはずである。しかし、それを長子は「をかしげに」思ったと断定している。また、自分の着た衣の色合いが雪と対照して「めでた」かったので、人を召さずに眺めていたのだと断定している。

長子と堀河帝が共寝をし、その翌日が雪であったことは事実であったとしても、堀河帝がずっと長子を見ていたかどうかは分からない。まして、長子の姿に見ほれていたので、人を呼ばなかったとは言い切れない。何か別の理由があったとも充分考えられるのである。それなのに、長子は堀河帝の心情まで代弁して記述しているのである。

また、

四月の衣更へにも（中略）人見合へれど、われは見まほしからず。これを「をかし」とおぼしめしたりしが思ひ出でられて。……（第二五節）

という箇所でも、「をかし」とお思いになられたのが思い出されると堀河帝の心情を思い出し、代弁している。

をととしのことぞかし。参らせ給ひて、弘徽殿におはしまいしに、この御方に渡らせ給ひしかば、暫しばかりありて、「今は、さは、帰らせ給ひね。日暮れぬ前に頭梳らむ」とそそのかしまゐらせ給ひしかば、「今暫しさぶらはばや」と仰せられたりしぞ、いみじうをかしげに思ひまゐらせ給へりしなど、ただ今の心地して、かきくらす心地す。……（第二〇節）

という箇所でも、我が子、鳥羽帝を見る堀河帝の心情を代弁している。

……走りおはしまして、顔の許にさし寄りて、「誰ぞ、こは」と仰せらるれば、人々、「堀河院の御乳母子ぞかし」と申せば、「まこと」とおぼしたり。……（第二〇節）

では、鳥羽帝が本当だと思ったと鳥羽帝の心情を記述している。

堀河帝・鳥羽帝がこう「言った」ではなく、こう「思った」と、しかも完了の形で書く、長子のこのような心情はどこから来ているものなのであろうか。これは自分がこう見られたいという願望と現実とがいつの間にか混在してしまったという結果と考えることもできる。

願望と現実が混在してしまっているとしても、このような記述の仕方は単に長子の願望が文字化されて表層に現れてしまっただけのものであると見てしまっても良いだろうか。松本寧至氏[5]によれば、長子は「より本質的に、同化しやすい」性格であったようである。長子が同化しやすい性質であったということに関しては、その通りであると私も思うが、私の考える「同化」は松本氏が

とにかく、作者の感情が天皇に移され、天皇の苦しみが作者に伝わり、天皇の苦しみを苦しんでいることが、この文章からも窺われる。[6]

と述べられているような感情が派生するという意味合いではない。ここで私が使用している「同化」という言葉の意味は、外因を取り込んで自分のものにする、あるいは、全く同質のものになるといった類の同化ではない。自身の思い込みによる同化という意味である。それはむしろ相手を自身の中に「取り込む」と言った方がいいのかもしれない。長子が外的にも内的にも相手と一体化したということではなく、長子が相手を自身の内部へと「取り込む」ことによって長子の側からは相手は自分と同じ心情を持っていると「思い込む」ことである。両者の間に感情等の相互関係があるのではなく、全くの一方通行によってなされる「同化」である。なぜならば、『讃岐典侍日記』からも他の史料からも、堀河帝が長子をどう思っていたかを知る事が出来ないからである。

この長子の同化しやすい性格により長子の意識は相手を取り込んで「同化」し、本来分かるはずのない相手の感情までも書き記す事へと繋がったのではないだろうか。雪の朝の表現も更衣えの表現も、その長子の相手との同化した状態をよく表している部分ということができるだろう。

堀河帝が長子をどのように思っていたのかは分からない。長子と共寝をし、朝をすごす仲ではあるから、嫌ってはいないのであろうが、だからといってその感情が長子と対等のものであるとはいえない。堀河帝と長子の心情が全く同種で重なり合っていたということは言いきれないのである。だが長

子自身は、自分の感情は堀河帝の感情と重なり合っていると思っていたのではないだろうか。言いかえれば長子の中では自身の感情は堀河帝のものと同一であると信じていたということになる。単純な思い込みではなく、当然のごとく同じ心情であると病質なまでに信じる、これが彼女の取り込みによる「同化」である。

長子にとって、堀河帝は愛しい男性であると同時に、自身と心情的に同化した存在、すなわち自分自身でもあるということができる。ということは当然、記述の上においても「言った」ではなく、「思った」で問題はないのである。

（三）

そうであるのならば、堀河帝の置かれていた立場もまた、長子に大きな影響を与えたといえる。

中村成里氏[7]はこの頃の社会情勢に関して、以下のように述べている。

政治状況は複雑な様相を呈し、閑院流藤原氏の公実や、村上源氏の顕房・雅実、「中右記」の作者藤原宗忠の従兄弟宗通を中心とする「白河院近臣グループ」と、堀河天皇近習村上源氏国信を中心とする「親政派」、村上源氏俊房を中心に、白河院の弟輔仁親王を擁立しようとするグループ、摂関家というように、単純化してもこれだけの集団が、陰に陽に駆け引きと抗争を繰り広げていた。

『讃岐典侍日記』は、まさに白河院政が本格化する前後を背景としている。

確かに、堀河帝が帝位に就いていた時期は、「堀河朝」という言い方よりも、白河院による院政全盛期という言い方がなされる。それゆえに、白河院の事ばかりが言われ、当時堀河帝がどのような状況に置かれていたのかについては、多く語られない。

白河院は『今鏡』[8]に

……國の政事、廿一の御齢より自ら治らせ給ひて、位におはします事十四年なりしに、三十四にて位降りさせ給ひて後、七十七までおはしましゝかば、五十六年國の政事をせさせ給へりき。（中略）御子、孫、ひゝご、うちつゞき三代の帝の御世、みな法皇の御政事なり。久しく世を治らせ給ふ事は、昔も類なき御有様なり。……

と評されているほど、自己の権力というものに対して、並々ならぬ思いがあった人物と考えられる。

堀河帝は白河院と、藤原師実の養女賢子を母として生まれる。応徳二年十一月一〇日皇太子実仁親王が死亡し、翌応徳三年一一月二六日、堀河帝は立太子と同時に八歳で即位している。

堀河帝・摂関家・白河院の政治的な駆け引きについては、多くの史料を元に、ある程度推測を立てることはできるが、堀河帝が父親としての白河院に対してどのような感情を持っ

ていたかをこれらの史料から窺い知る事は難しい。

さて、長子が堀河帝に出仕した頃はというと、日記冒頭の

思ひ出づれば、わが君に仕うまつること、春の花・秋の紅葉を見ても、月の曇らぬ空をながめ、雪の朝御供にさぶらひて、もろともに八年の春秋仕うまつりし程……

（第一節）

という記述から康和二年前後に典侍として出仕したと考えられる。

六月二十日のことぞかし。内は例さまにもおぼしめされざりし御けしき、ともすれば、うち臥しがちにて……（中略）「こと重らせさせ給はざりし折、御祈りをし、つひにありける御ことをも譲りまゐらせらるる」、とわが沙汰にも及ばぬことさへぞおぼゆる。（第二節）

かくて、七月六日より、御心地大事に重らせ給ひぬれば、誰も、月頃とても、例さまにおぼしめしたりつることは、難きやうなりつれども、これがやうに苦しげに見まゐらすることはなくて過ぐさせ給ひつる……（第三節）

「例さま」というのが、その人にとってどの程度を言うのかは分からないが、史料を辿ると、堀河帝は生来あまり丈夫な方ではなかったようだ。堀河帝が政治に関する関心や父親の様子に対してどの程度のものを持っていたか、心情的なことは分からないが、少なくとも健康状態が足を引っ張り、自分の思うようにならないことも多かったであろうと思われる。

そのような時期に長子は堀河帝に出仕したのである。

堀河帝が置かれている状況は、長子の取り込みによる「同化」にも影響を与えていると思われる。

従来、『讃岐典侍日記』の中で、長子は度々白河院に対して反抗的な態度を見せているように思われると述べられてきた。例えば、鳥羽帝の御帳上げにつき、服脱ぎが院宣として申し渡された折、

……「院宣にて、摂政殿の承りにてさぶらふ、『堀河院の御素服賜はりたらば、疾く脱ぐべきなり』と宣旨下りぬ。疾く脱がせ給へ」といひにおこせたり。かばかりのことだに心にまかせず、道理に脱ぐべき折りも待たず、脱ぎてむこと、心憂きに、「芹摘みし」といひけむ古言を、身に思ひよそへらるる。

かく沙汰するを聞きて、せうとなる人「あはれ、男の身にてかくいはれまゐらせばや。うらやましくもおぼえさせ給ふかな。女の御身にてさらでもありなむ。故院の御時に、年頃の人たち・御乳母子たちなどの賜はり合はれし素服を、何ばかりの年頃さぶらはせ給はざりしかど、賜はらせ給ふ。今の御時に、また、なほ大切に要るべき人にて、月も待たず、『脱げ』と宣旨下るもあやし」などいひ続くるを聞く程に、あじきなく、恥づかし。……

（第一七節）

と述べ渋っている箇所などがその筆頭に上げられる。

宮崎荘平氏[9]によれば長子の出仕は「作者の姉兼子は堀河帝の乳母であったから、おそらくその縁によってなんらかの役で堀河内裏に出仕し」たものであるようだ。その藤三位（兼子）が堀河帝の乳母に推挙されたのは後三条院、ひいては白河院との関わりによるものではないかとの説もある。[10]という事は、姉の繋がりで出仕した長子もある意味白河院との縁続きで出仕したと考えられよう。単純に考えれば、長子は白河院の繋がりで出仕したのであるから再出仕を渋る必要はないはずであり、渋る理由には白河院に対する何だかの反抗心があったと考えられてきたのである。

また、鳥羽帝への再出仕を長子が渋ったのは、「単に二代の天皇の仕えることの嘆きではなく、多くいる堀河朝の女房の中で、一番の愛妾を自負する自分がその立場を無視され、一番低い扱いをされたことへの憤りだった」という太田たまき氏[11]の説もある。

今一度本文を見直してみようと思う。弁三位を通じて再出仕の話が来た時、長子は、

……おはしましし折より、かくは聞こえしかど、いかにも御答へのなかりしにぞ、「さらでも」とおぼしめすにや、それを「いつしか」といひ顔に参らむこと、あさましき。（中略）故院の御形見には、ゆかしく思ひまゐらすれど、さし出でむこと、なほあるべきことならず。……（第一六節）

と述べている。鳥羽帝には拝謁してみたいが、待っていたかのように参内するのはあきれたことだと言うのである。また、八月の「御渡り」も参上しない理由は

……されば、われは、変はらぬ九重の内の有様を見むに、初めたる御渡りに、え念ずまじき心地のすれば、「参らむ」とも思はぬに、……（第三〇節）

と述べるように、変わりのない内裏の様子を見ると鳥羽帝の初めての渡りなのに、泣けてしまうだろうと思うからである。

つまり、彼女は、政治的に対白河院という感情を持っていたのではなく、自分の心情に沿わないことに関して、拒否し思い悩むのではないだろうか。そして、彼女の「同化」しやすい性質を考えると、彼女の判断基準にはどこかに堀河帝というものがあったように思われてならない。だとするならば、堀河帝がどのように思っていたかとは別に、堀河帝とは関係しないものを好もしく思っていなかったと読むこともできるのである。

（四）

「御心ばへあてにやさしくおはしまし」[12]笛を好み、和歌を好み、「この帝、三十にだに満たせ給はぬ、世の惜しみ奉る事限りなかるべし」[13]と評された堀河帝を長子はどんな思いで見つめていたのだろうか。相手を取り込むことにより、心情を「同化」させていくと同時に長子の中に、弱い存在を庇護

してあげたい、というような感情が生まれていたとしてもおかしくはないのではなかろうか。

堀河帝は母親の愛情に疎い人物である。母賢子は堀河帝五歳の折に亡くなっている。准母という形で提子内親王が後宮入りしたのは、天皇が十三才の時で、本当に母親が恋しいという年齢を過ぎてしまっている。また、仮に堀河帝が提子内親王に母的なものを求めていたとしても、彼女は後宮入りした後も、度々白河院と物詣などに出かけるなどしており、堀河帝の意図した形で身近にいてくれた存在とは言い難いだろう。

堀河帝の後宮の入る女性については、「かれこれ定められ侍りけれども」[14]とあるように、様々にとりだたされたようであるが、堀河帝自身の

殊の外の御齢なれど、幼くより類なくみとり奉らせ給ひて、たゞ四の宮をとかや思ほせりけるにや侍りけむ。[15]……

との強い希望により、白河院の妹で十九歳年上の叔母・篤子内親王が入内している。十九歳という年齢差を考えても、堀河帝が幼い頃から慕っていた叔母に対して、母親に対するような感情を持っていたとしてもおかしくは無い。

一方篤子内親王の方はこの入内を「いとあはぬ事」と思っていたようである。この「いとあはぬ事」は従来「年齢が」堀河帝と「いとあはぬ事」と解されている。十九歳という年齢差を考えれば、もっともなことと言えるだろう。だがもう一つ、兄白河院・甥堀河帝の立場、そして自分の立場というものを考えたとも考えられる。自分が女御として入内し、立后することは、白河院の妹として、堀河帝の妻として、身動きが取れなくなる事が予想される。それを思うから、堀河帝には自分は「あはぬこと」と思ったとも考えられるのではないだろうか。

篤子内親王はその後、史料等にもあまり名前を見る事が無い。だが、堀河帝のことは心配していたようで、

鳥羽の帝の御母の女御殿茨子も参り給ひて、院もてなし聞え給へば、はなやかにおはしましゝかども、中宮篤子は盡きせぬ心ざしになむ聞えさせ給ひし[16]

と書かれていることからもそれは分かる。白河院の威光によって入内した茨子に対して篤子内親王は不安を持っていたようである。だが、それは、当然茨子本人に対するものではなく、その後ろにある白河院が堀河帝に与えるであろう影響に対してであろう。

堀河帝には乳母が四人いるが、「光子に限らず他の堀河帝の乳母たちも、いづれも当然ながら白河院に近い家の人々であった」[17]ことから見ると乳母全員が白河院の息のかかった人間であるといえる。

堀河帝としては、何をおいても味方になってくれる存在として乳母を見る事はなかったのではなかろうか。篤子内親王は、堀河帝を気にかけてくれてはいるが、それは堀河帝本人を気遣ってくれていたものなのか、政治的配慮によっていた

ものなのか分からない。

外的な事態を見ると、堀河帝は何を置いても味方になってくれる女性としての母性を求めながら、そんな人物が周囲にいない男性のように見える。しかし、断定要素に欠けていることは否めない。堀河帝が女性というものに対してどのような感情を求めていたのかに関しては、別の機会に考えてみたい。

問題は、長子が何があろうとも味方をしようとする母親のような愛情を持っていたかどうかである。長子がそのような感情を持とうと思っていたと考えるのは、私の考えすぎであろうか。

長子に対する堀河帝の態度が男女のそれよりも、子供が母親にする愛情表現なのではないかと思われることがしばしばある。

さぶらひし折、更けし様に、所狭かりし心地せしものを、まして、「出でよろこびす」とて、「わびさせむ」とおぼしめしたりし折は、あやにくがりて、頓にも御手も触れさせ給はざりしものを。(中略)「われは何の心にかさまでは思ひ給へむ。持ちゐたる供人・いづみなどこそわびしからめ」と申せば、「いづみもわびよ。いけもわびよ。われ、苦しからず」と仰せられて、御畳の上にうち臥させ給ひて、見つかはして、「あはれ、ゆゆしぞ。憎げに思ひたる様こそ著けれ。いかがせむ。『苦しければ、うち臥してやすむぞかし』と、暫し念ぜよかし。あなわびし」など仰せられて、さまでなきことこちたげに仰せられなして、笑はせ給ひしこと……(第三七節)

などといった子供じみたやり方は、堀河帝が長子に対して甘えているように見える。いや、これは長子が堀河帝を取り込んで「同化」することによって書かれているのだから、長子は自身を堀河帝が甘えられる存在であると思っていたと考えられる。そして、この甘えの授受は、男女の恋愛というよりも、母親が子供のわがままを許す、それに近いもののように思われる。

六月の扇引きで

……「美し」と見しを引き当てで、中に悪かりしを引き当てたりしを、上に投げ置きしかば、「かかるやうやある」とて、笑はせ給ひたりしことを、但馬殿といふ人の、「家の子の心なるや。異人はえせじ」など……(第二七節)

という部分について、小谷野純一氏[18]は

……全体的には、帝の眼前で扇を投げ置くなどといった無作法な行為は作者以外の者にはできぬ、との評言になっている。帝と己れは私の次元に於ける対人圏にあり、そうした「異人」、即ち、他者に優越する自己の存在性は、同僚の間でも諒解されているといった如き意味合いを有している。「但馬殿」の発言が実際にあったのかどうか、

もとより知る由もないが、このような客観的な視座の措定も慰籍の構図の内になることに気づいておきたい。該当部分は、「など、興じ合はれしに」と地の文に連続して行くが「興じ合ふ」という仲間達の好意的な眼差しは、何とも異様であること、付言しておこう。

と述べられている。小谷野氏が述べられている「他者に優越する自己の存在性」は、勿論他者から二人の男女の関係が世間的に認知されているということを長子自身が自負していたことの現れに他ならない。だが、同時に「但馬殿」の発言から二人の行動が家族のあり方に近かったと思われていると長子が思っていたとも考えられるのではないだろうか。

そう考えると長子は堀河帝に対して、母的な愛情を持って接していた部分もあるのではないかと思われるのである。

堀河帝が長子という一女性を女としてどう思っていたのかは謎のままであるが、長子としては、堀河帝を恋人として思い、時には自分だけはどこまでも堀河帝の味方であるといった、母的な愛情を持った存在であると思っていたのではないだろうか。

堀河帝崩御前、

……「何か、今弛みたるぞ。今こころみむ」と仰せられて、いみじう苦しげにおはしたりければ、かた時御かたはら離れまゐらせず、ただ、われ、乳母などのやうに添ひ臥しまゐらせて泣く。……（第三節）

長子は、病床の堀河帝を看病し続け、その心情は限りなく「乳母」に近づいていっているともいえる。

……われは、御汗を拭ひまゐらせつる陸奥紙を顔に押し当ててぞ添ひゐられたる、『あの人たちの思ひまゐらせらるらむにも劣らず思ひまゐらす』と、年頃は思ひつれど、なほ劣りけるにや、あれらのやうに声たてられぬは」とぞ思ひ知らるる。……（第一四節）

また、「あれら」＝乳母達のように声を立てられないというのは、自身のショックに気がついていないと見る事もできるが、その比較対照に「乳母」を用いているのは、彼女の心の中のどこかに、母代わりとしての母的な擁護性があるからだとみることもできるのではないだろうか。

……殿にも、「上りて見せまゐらせばや」と申させ給ひければ、「今の程、宮上らせまゐらせむ。もの騒がしからぬ前に」と思ふに、……（第九節）

という部分でも、中宮への行動でありながら、「上らせまゐらせむ」と使役の形がつかわれていることに着目したい。「騒がしくならないうちに参上させて差し上げよう」という発想は関白の発言の有無に関係なく、長子が堀河帝の様子を見て自然発生的に思ったことなのではないだろうか。長子のこのような発想は男女の仲とはまた別の、母的な愛情から出てきているもののように思われる。

彼女がその内側にどれほど母性というものを意識して持っ

ていたかは分かりえない。しかし、誰かを何からも被い、そのために心を砕くのは男女の仲だけでは説明のつかない感情のように思われる。母に近い有り方で存在しようとする彼女を見る時、彼女の強さを思わずにはいられない。堀河帝を、死の床にあっても思いやりのある人物であった、あるいは、風流を解する人物であったと、書き綴る彼女の姿勢は一途で力強く男女の仲以外の何か別の強さを感じさせるように思われる。

典侍として出仕しながら、家も自分の典侍としての立場も無視して恋人として母的な存在として、一人の人物と共にあろうとし、そして自身の感情と一体となるまで誰かを思う女の強さをこの日記からは感じるのである。

注

(1) 内海弘藏氏は藤原顕綱女兼子であると主張されているが、(日本文学叢書『狭衣濱松中納言物語　堤中納言物語　讃岐典侍日記　唐物語　中務内侍日記』内外書籍株式会社　昭和六年十月発行　解説より)これは、『中右記』嘉承二年十二月朔月条の「右藤兼子、故顕綱朝臣女也、元典侍」による誤認である。

(2) 今井源衛「讃岐典侍日記」「国文学―解釈と観賞」至文堂　S三六・二

(3) 森田兼吉『日記文学の成立と展開』笠間書院　H八・二

(4) (2)に同じ

(5) 松本寧至「讃岐典侍の性格―『讃岐典侍日記』と『長秋記』―」日本文学研究資料叢書『平安日記Ⅱ』有精堂　S五三・一一

(6) (5)に同じ

(7) 中村成里「「讃岐典侍日記」における排除の構図―白河院・弁の三位の叙述方法―」「静大国文」第四二号　H一三・三

(8) すべらぎの中「紅葉の御狩」

(9) 宮崎荘平『平安女流日記文学の研究・続編』笠間書院　S五五・一〇

(10) 新編日本古典文学全集二六『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』小学館　H六・九　解説より

(11) 太田たまき「『讃岐典侍日記』―」「あまたの女房」考―」『中央大学国文』第四二号　H一一・三　中央大学国文学会

(12) すべらぎの中「玉章」

(13) (12)に同じ

(14) (12)に同じ

(15) (12)に同じ

(16) (12)に同じ

(17) 増田繁夫「讃岐典侍日記の主題―「忠誠」といふ人間関係」大阪市立大学紀要人文研究三七―七　S六〇・一二

(18) 小谷野純一『讃岐典侍日記全評釈』笠間書房　S六三・一一

《付記》

本文引用については以下の本を使用した。なお私に傍線を引いた部分がある。

小谷野純一編　新典社校注叢書9『校注　讃岐典侍日記』新典社　H一一・三　三刷

板橋倫行校注　日本古典全書『今鏡』朝日新聞社　S二九・三　二刷

御指導戴きました小谷野純一先生に心より感謝申し上げます。